

## (翻刻)『類題三河歌集』(二)

繁 原 央

〈竹尾正久輯『類題三河歌集』の「秋」と「冬」の部を翻刻する〉

## 秋

- 立秋 たちそむる秋のあはれをおのれのみまつしりかほにそよく萩はら 古道  
おき出て板井の清水結ふ手も今朝はす、しく秋立にけり 元亨  
風のおともまたほに出ぬ萩の葉に露みえそめて秋はきにけり 弘道  
萩の葉のそよく夕風みにしみてきのふにかはる秋は来にけり 釈義教
- 浦立秋 和田の原けしきかはりてあさはふる袖のうら浪あきたちにけり 宣光
- 古寺立秋 ふきかへてけさより風の西なるはとよらの寺に秋やたつらむ 常業  
あかたなのしきみのしつくおとす、しよかはの水もあきやたつらむ 公阿
- 初秋 朝戸出の庭のあさちの露はかり袖におほゆる秋のはつかせ 登波女  
けさみれは庭の桐の葉おちにけりこや秋風のしわさなるらむ 光尋」(32 オ)  
あかつきの鐘のひ、きも身にしむや秋の寐覚のはしめなるらむ 音空  
落そむるきりのひと葉に秋きぬとうちおとろけは風そ身にしむ 菅沼定典
- 初秋風 この朝けあきくとつけて吹風のおとはかなしきはしめなりけり 浅井竹甫  
きのふまてうすきものともしらざりし蟬の羽そてに秋風そふく 忠敏
- 里早秋 うちつけにみにしむつまとなりにけり寐覚の里の秋の初かせ 信由
- 早秋旅 朝たちて露ふみしむるわらくつに秋をおほゆるきのふけふかな 直温
- 残暑 夕日さすかた山里の松の戸にいつまで残るあつさなるらむ 常業
- 蟲声催秋 あつしとてなれしはしるのうた、ねに秋をことわるよはの虫の音 公阿
- 七夕 かへさには水やまさらんあまの川わかれの涙雨とふりなは 和田古元  
こよひのみかわく袂にさす棹のしつくなかけそあまの川長 安全」(32 ウ)  
くる、まもはるけきものを天の川年のわたりをいかて待けむ 古道  
あまの川あひ思ふ中のわたりにはなとうちはしをわたさ、りけむ 恒雄  
天の河人目つ、みもなきものをいかてひとよを待わたるらむ 美祢女
- 待七夕 あきたちてけふ社七日彦星のくれゆく空をいかにまつらむ 山田則矩
- 七夕草 たむくるをおなしたくひとほしや思ふこよひ紐とく萩のはつ花 外山成庸
- 閏七月七夕 こよひまたほしやあふせをしのふらむふた、ひわたせかさ、きの橋 信由
- 魂祭 おくり火のかけよりみれはなきたまの行へはほそき烟なりけり 大成

- 盃蘭盆 なき人のこのよにかへる秋とてや草木の露も玉とおくらむ 常業  
 萩 身につもる秋のあはれをいかにせむゆふへ、の萩の上風 正興  
 庭の萩かりもはらはてうき秋の風のやとりとなしてけるかな 宣光」(33 オ)  
 萩風 窓近きをきの上葉を吹風にあはれこよひも夢やのこさむ 寺尾清典  
 ひとりぬる枕に近くおとつれてよた、みにしむ萩の上かせ 高津三真  
 萩の葉をよきてしふかばかくはかりゆふへの風の身にはしましを 浅野本教  
 草花 野辺みれはむしのねなから我園にうつさまほしき花のやち艸 正寛  
 草花露 心なき艸たに秋はおもふ事ありのひふきの花のゆふ露 政弘  
 水邊草花 萩か花かつちる池の秋風にさ、波まねくきしのをす、き 忠順  
 萩 あきの来てまつさく萩の一枝はおりと、のへぬ錦なりけり 千秦  
 夕やみにわけこし花やはきなりしけさ紫に袖のにほへる 元亨  
 ぬきとめし露の玉さへあやなして錦おりかく庭のいと萩 林景美  
 名所萩 宮城野の小はさか露はおもくとも風をはまたし花もこそちれ 古道」(33 ウ)  
 あき、ぬといはせの小野のいはねともいろにみえたる萩のはつ花 釈慈賢  
 薄 吹はらふゆふへ、の風なくは尾花か袖や露にくちなん 重信  
 野薄 たまぐらの野へのす、きのやはらかにぬるよもなくてたれまねくらん 登波女  
 故郷薄 ふるさとの水なき池にたつ浪は一村しけるをはななりけり 忠敏  
 葛 七艸にかすまへられし葛のはも風にうらみはあるよなりけり 政弘  
 女郎花 をみなへしおもひのいろのした染とみたる、露に秋風そふく 常業  
 女郎花たかあきかせにあひぬらむたてるけしきもうらふれにけり 染矢清忠  
 みわたせはあきの花野に名もしるく今を盛の女郎花かな 竹尾満須女  
 をみなへし名をむつましみ立よれはうたてへたつる野への朝霧 豊村  
 藤袴 かすか野にいまも匂へる藤袴むかしをとこのかたみなるらん 鶯山」(34 オ)  
 朝顔 よの中はかくこそありけれときめくもた、露のまのあさかほの花 忠順  
 いろかへぬ竹のまかきに朝貞のまとひて露のよをかこつらむ 常業  
 あすさかむつほみかそへてゆふへよりまつまひさしき朝貞の花 鶯山  
 刈萱 むらさめのはる、かたの、かるかやは露よりさきに打みたれけり 鈴木峯彦  
 露 物おもふ袖のうへよりおきそめてやかて草葉にあまる露哉 柴田松充  
 たもとよりたちし秋にもあらなくなとかく露のおきまさるらむ 篤議  
 曉露 在明の月はしらめるをりしもあれ光りそひたる露のしら玉 祐巖  
 草上露 こ、ろなき草の袂もしをるめりあきのさかの、露の夕くれ 富田篤敬  
 野露 むさし野やはてなくみゆる秋草におきあまりたるけさの露かな 釈真道  
 古郷露 いにしへのいてましところこ、ならむ今はた露の玉しきてけり 忠順」(34 ウ)  
 蟲 あきの野の花の錦はいろくれて鳴むしの音にあやは有けり 古道  
 うき秋の真葛か原の夕暮にうらみかほなる虫の聲かな 専福寺宇津乃女  
 夜虫 聞侘ぬ花のねさめのきり、すわかよふけゆく程もしられて 釈徳充  
 月前虫 くもはれてちりものこらぬ月の夜は虫の声さへくまなかりけり 小久保久道  
 露しけみ草のたもとはかつきてもぬる、かむしの月になくなる 正久  
 野虫 やとるへき草のいほりもなきものを日もくるすの、松虫のこゑ 太田久女  
 秋風に鳴なる小野のまつむしの声あはれなる夕くれの空 伊藤高亮

旅宿虫 ふる里のかへにきゝつるきりゝゝすさむれは草の枕なりけり 美石  
 虫聲迷 秋風に尾花ちる野のきりゝゝすよひゝゝことに聲そかれゆく 積了游  
 秋夕 萩の葉となにおもひけむおとせぬもさひしき物を秋の夕くれ 美石」(35 オ)  
 ゆふくれの空をあはれとなかむれは袖より秋のつゆはおきけり 義宣  
 物さひし雨もあらしもおとたえておち葉たにせぬ秋の夕暮 公阿  
 むしの音もをきの葉風もわか為にあはれをそふる秋の夕くれ 坂部幹善  
 なかめわひぬ秋のゆふへの袖の露うきはならひと思ひ捨ても 松坂三輪女  
 こゝろからぬらす袂を秋にのみうらみかけたる露のゆふくれ 忠敏  
 海邊秋夕 あはれさをみつの濱辺のそなれ松なれてもさひし秋の夕くれ 美祢女  
 山家秋夕 みやまへのあきのゆふへやたへかねむよになきことも思ひなさは 積良空  
 山さとは嶺のあらしに鹿なきていよゝゝさひし秋の夕くれ 太田正忠  
 秋夕遠情 から人もたもとしほりてなかむらん松浦の沖の秋のゆふくれ 忠順  
 秋風 まつにふきをきにやとれと秋風のゆふへさひしき声はかはらす 繁樹」(35 ウ)  
 もみちするさくらか枝に吹風のつらさは春にかはらさりけり 廣冬  
 秋風漸寒 から衣きのふにけふはふきかへて身にしみそむるそての秋風 義方  
 草菴秋風 露のみをやすくおかむと結ひたる草のいほりも秋かせそふく 宣光  
 古陵秋風 もすの啼聲もきこえて耳原や秋風寒しみさゝきのまつ 忠敏  
 稲妻 いなつまのかよふ稲葉の末みれは露は久しき物にそ有ける 古道  
 おもふかたありともみえすよひゝゝの空さためなくかよふ稲妻 千濤  
 秋田 夕日さすおくてのいなは打なひき田面はるかにわたるあきかせ 年乃女  
 里遠きにひはりをたも八東穂のしなひさかえて秋風のふく 美志女  
 かせわたる稲葉の浪のよるゝゝはもる袖寒し小山田のいほ 小島秀女  
 あきかせになひく山田のいねかてにひとりもるよのなかくもある哉 遊佐高岑」(36 オ)  
 稽田 露霜のおくての稲もかりはてゝひつちにのこるをたの秋風 重熙  
 そほつ たのみつる小笠もゆれてふる雨にいかはかりみのそほつなるらん 祐利  
 霧 にはとりの聲よりのちもたちこめて霧こそ秋のよいのこしけれ 美石  
 さらぬたにほとなくくるゝ秋の日をなにゆふきりの立かくすらむ 藤井義貫  
 伏見山松のむらたちほのみえて鳥羽田に靡く秋の夕きり 忠敏  
 山霧 山ふしもわけやわふらむ朝霧に残るよかはの杉の下道 千濤  
 しは人のともよひかはす声はしてたつきもしらぬ山の朝きり 村上恭臣  
 河霧 すゝか川ひと瀬ふたせと晴わたるきりのゆくへに朝風そふく 顕光  
 霧こめてそこともみえす淀川やめくる車のおとはかりして 今井信  
 みるかうちにみなかみ遠く立こめて霧よりくるゝ秋の川つら 鳥山那美女」(36 ウ)  
 はやふねにのれともいはずすみた川夕きりひとり立わたるころ 公阿  
 海邊霧 なにはかた浪路もみえぬ夕霧につりするあまの声きこゆ也 忠浄  
 田家霧 しつのかもる袖いかにしめるらむ夕きりまよふをたのかり庵 利善  
 小鷹狩 はしたかの小鈴にかよふむしのねをくるればわけてかへる狩人 登波女  
 鶉 秋の夜の月の光もうすらきてあけかた寒くうつら鳴なり 吉田義治  
 故郷鶉 あれはてしわかふるさとの浅ちふにすみかはりてもなく鶉かな 安井允義  
 鳴 もゝはかきはねかくしきそきこゆる袂の露を拂ふねさめに 山中五百杵

村雨のふる江の水の末くれて物かなしきのこゑのみそする 英棟  
 露しけき床いかはかり寒からむおとも身にしむ鳴のはねかき 忠浄  
 曉鳴 もゝはかきかすかきわひてあかつきにとひたつ鳴の音にや鳴らむ 美石」(37 オ)  
 澤鳴 浅からぬあはれしれとや澤水に月をのこして鳴のたつらむ 利善  
 駒迎 くもりなきよにすむかひの黒駒や月のみやこにけふのほるらむ 音空  
 月 月かけの清き雲井にこのゆふへひかれてのほるきりはらの駒 乗正  
 位山人のほりする高ねをはきよくはなれてすめる月かな 政弘  
 こほれおつる袖の涙のかすゝゝに物おもはする月のかけかな 長廣  
 秋のいろはなかめしと思ふゆふへたにくるれはむかふ山のはの月 辻柳女  
 山のはにさし出る秋の月かけをくもりなきよのかゝみとそ見る 永井勝久  
 見るからに物をおもへはくはしめにさもはた似たる月のかけ哉 正久  
 待月 まちわひてよはゝむこゑを山彦よあなたおもての月につけこせ 常業  
 心あての高ねに雲のたゝよひて月かそけなるよはにも有かな 真武」(37 ウ)  
 海上待月 ふな人よからろとくおせいそ山のかかけはなれて月をまたまし 千濤  
 獨見月 むかしたにかなしと思ひし月かけをわかよもふけてひとりみるかな 常業  
 さやかなる月にはおのかかけそひてひとりみるともおもはさりけり 賢亮  
 馴月 雲のうへの物なりなから袖のうへになるれはなるゝ秋の月影 音空  
 八月十五夜 月なみも秋のもなかのかつら川こよひをせにやてりわたるらむ 常業  
 よのつねの月にはあれともちのよはみる人からやさやけかるらむ 登波女  
 閏八月十五夜 あなうれし年のあまりもあひにあひて月のはつきにめぐりきにけり 千濤  
 九月十三夜 十日あまりけふ三日の原いつみ川いつより月の名になかれけむ 常業  
 秋の夜もやゝなか月のかけすみてもちにもまさる今宵なりけり 祐巖  
 月依所明 海原の浪にはちりもうき雲もかゝらてすめる秋のよの月 徳倉充芳」(38 オ)  
 月不撰所 からたちのたちもよられぬ垣根たに露へたてなくやとる月哉 信由  
 秋月勝春花 秋の夜の月は花にもますかゝみくもらぬかけになにかしくへき 惠直  
 狂雲妬佳月 よはなへて花にあらしのことわりを空にもみするむら雲の月 政弘  
 客伴月来 くつのおとのきこゆる軒のあしすたれあくれは月のかけもとひきぬ 繁樹  
 愁人對月 いむといひしかけに袂をぬらすこそ月にはこりぬうきみなるらめ 政弘  
 月下美人 望月のみてるおもわにあらそひてむかふをとめのかけひかるなり 公阿  
 對月思往事 いにしへもこゝろつくしになかめけむ庭の木のままの在明のつき 村上八千代女  
 月似霜 霜とみてはらへと跡もなかりけりおきぬるよはの袖の月かけ 常業  
 月如鏡 つきみれはいとゝあはれもます鏡いかにみかけるひかりなるらむ 浅野泰洲  
 名所月 すまの浦やひまなきあまもよをこめて月の鏡にくしけつるらむ 中島安年」(38 ウ)  
 もち月のかけはますみのかゝみ山八十の湊もさやかにそ見る 充芳  
 むさし野の草はみなからあはれなり露にやとれる月のひかりに 大橋俊武  
 あかしかたせとのしほちに船とめてあけゆくまでもみつる月かな 松下綱前  
 山月 ちりひちのつもれる山を出てこしかけともみえぬ月のさやけさ 常業  
 山月入簾 玉すたれもる月みれはあしひきの山よりいつるかけとしもなし 八千代女  
 深山月 まかみなく聲ものすこき山里の月の夜道はあふ人もなし 速夫  
 なにこともしらぬ山こそやすけなれ月もこゝろもすみわたりつゝ 年乃女

- 河月 　　すゝか河ひとせ二瀬とくれそめて八十瀬にうかふ月のかけかな 鷺山  
清瀧の川瀬の夜風おとふけて玉ちる浪にやとる月かけ 長廣
- 野月 　　むしのねも露の光もさやかにて月はのへにぞみるへかりける 忠順」(39 オ)
- 野径月 　　わけゆかむかたこそなけれむさし野の露はみなから月やとりけり 古道
- 原月 　　弓張の月の光もみにしみて小手さし原に秋かせそふく 忠敏
- 澤月 　　ふけぬるか物さひしきの羽音して野沢にすめる秋のよの月 小川清蔭
- 井月 　　くむたひにひさこにゝこるいさら井の底にもあはれ月はすみけり 村上真謙  
雲はらふ風のみかきて玉の井にやとれる月のかけのさやけさ 本教
- 池月 　　池のおものみくさはらひしいたつきも月すむよこそみえわたりけれ 公阿  
あきのよのくまなき月にみさひうく鏡の池もくもるとは見す 定春
- 瀧月 　　老となる月のひかりをせきいれてくろきすちなきよはの瀧つせ 常業
- 江上月 　　にこり江のそこのみくつもみゆはかり秋のよ深くすめる月かな 清忠  
かつきても手にはとられし水底にしづく玉江のあきの夜の月 古道」(39 ウ)
- 湖上月 　　すはの海やくまなくさゆる月かけの氷をわたるよはのあき風 宣光  
からさきのまつをそかひに漕出て波のほしろき月をみるかな 忠順
- 海邊月 　　しほさみのあらいそ波のよるみえて月かけゆらく玉の浦かせ 全  
月清みこきかへるこやわすれけむふけてもおきのあまのふなうた 繁樹  
こきかへるあまの小ふねも月夜よし夜よしとうたふ聲さやか也 菅守
- 浦月 　　ふねとめてこよひもこゝにうきねせむ月も心もすみよしの浦 利善  
しほたるゝ袖にもかけのやとりきて月のきぬきるすまのうら人 小池恭  
くれぬとも猶もゆかはや旅の空つきもあかしの浦つたひして 宣光  
安房上総なみにうかふとみるほとに月おしてれり竹芝の浦 祐巖
- 船中月 　　たかせさす棹のしづくにいく度か月かけこほす淀の舟長 速夫」(40 オ)  
月みつゝあかぬ心にこく舟はこゝそとまりといふかたもなし 重見
- 松間月 　　吹風は空にしられぬ時雨にて松のひまもる月のかけかな 空阿  
むらたちの松の梢をもる月は雲まにすめるかけとみえつゝ 資生
- 關月 　　すゝか川八十瀬の浪のおとふけて関より西に月そなりゆく 古道
- 關屋月 　　板まもる月にまかせて住あれしふはの関屋は戸さゝさりけり 顯阿
- 羈中月 　　草枕結ふあき野の露の上にこよひは月とあひやとりせり 宣光
- 旅宿月 　　くさ枕なれぬかりねの袖の上にひとりしたしき露の月かけ 美津女
- 旅泊月 　　なままくらうきねの床にねさめしているかた遠き月をみる哉 義宣  
うきねともおもはさりけりなみ枕月さやかなるみつのとまりは 木俣信貞
- 閑居月 　　ひとりのみこゝろすましてみつるかなよのうき雲はしらぬ月かけ 美祢女」(40 ウ)
- 草菴月 　　草の庵に秋はいかなる契りありて月のみ袖の露をとふらむ 宣光
- 古宅月 　　つきのためあらしやするととはるゝもあまりおもなき軒はなりけり 公阿
- 故郷月 　　月やあらぬ秋やあらぬとなかめても袖に露ちる古里の庭 全  
ふるさとは草にやつるゝゆふへともしらてや月のひとりすむらむ 岡田諸岳  
つきかけはすみし昔のあきなからむしのねすたく野と成にけり 義宣
- 山家月 　　身ひとつにあはれをしめて山里の月にもいたくなるゝあきかな 廣冬  
かけひもる水のなかれの末見えてひとすちなかき月のかけ哉 弘道

- 山深み軒端にきなくふくろふの声さひしくも月ふけにけり 利武  
 都月 こきませし柳桜の春もあれと加茂の川瀬の秋のよの月 宣光  
 禁中月 久かたの雲居の庭にてる月はこれそうへなき光ならまし 上田守景」(41 オ)  
 とのみするゆつるのおとも更行てみはしをわたる月のさやけさ 廣冬  
 社頭月 おく露の玉串のはにかけみえてしらゆふかくる月よみの森 常業  
 月前雲 なかめつ、たれうらむらむ我里にさはらぬ月のをちのむら雲 篤議  
 月前煙 しはらくは月のひかりのくもるかと思しはゆふけのけふりなりけり 杉本和豊  
 月前風 露なから庭の浅ちの月かけを袖にふきこすよはのあきかせ 忠敏  
 雲きりをはらひつくして月影にほこる外山の松風の聲 五百杵  
 かけなからこほる、松の露みれば月をも風はさそふなりけり 正久  
 月前木 あけまりのこ、ちこそすれ秋の夜の柳にかゝるもち月のかけ 親常  
 月前鐘 月かけはかたふく山のこのまよりくまなくもる、鐘のおとかな 釈秀楮  
 月前船 た、よへる雲もなきさのあま小舟月にうかれて棹やさすらむ 廣冬」(41 ウ)  
 雲霧は今宵なきさをこく舟にうかれて海人も月やみるらむ 菅守  
 月かけをなかめてさをもとらぬ間に岸の小舟のひとりなかれぬ 小野田隆影  
 月前燈 打わたすそもの田つら月澄てともし火くらき賤かふせ庵 英棟  
 月前涙 おほかたの露とや月はやとるらむなかむるからの袖の涙を 重鏡  
 月前遠情 さきもりか妹こひしらになかむらむ心つくしのあきのよの月 廣冬  
 馬 はつかりの鳴音さやかに聞ゆなり月のあたりを今かゆくらむ 真清  
 友したふ聲もはるかにこしちよりおくれてわたる厂の一つら 鈴木光清  
 横雲になかはかくれて聲すなりあけ行空のかりのひとつら 堀部廣成  
 初雁 かきくもりおもひたえたる大空に月をも見する初かりの声 菅守  
 つきにたに心つくしの秋のよにふけてきこゆる初厂のこゑ 鳥羽吉虔」(42 オ)  
 新雁横月 えみしらかもしの横濱てる月にとふはつかりのかすそよまる、 公阿  
 さやかなる月のくまにはならしとてまたはつ秋にわたるかりかね 釈明空  
 はれわたる月のくまとはなりぬれとにく、もあらず初厂のこゑ 行阿  
 月前雁 からろおすおとそきこゆる初厂や月のみふねにのりてきつらむ 古元  
 空高く来る初厂をひさかたの月のかつらのちるかと思みる 古道  
 もみちする月の桂をしをりにて厂は雲路をまよはさるらむ 常業  
 久かたの雲よりうへをとふかりはさはる物なき月やみるらむ 釈鶉阿  
 くまなすもなか、うれし月かけのさやけき空をわたる厂かね 青山親昌  
 霧中雁 わかれにしはるのうらみははれぬれとゆふきりくらし初かりの聲 平松秀光  
 やつれこし旅のすかたもみせしとや霧たつ空に厂わたるらむ 釈實綱」(42 ウ)  
 雨中雁 ふる雨にぬれて翅やしをれけむな、めになりぬ厂のひとつら 鶯山  
 海上雁 夜をこめてこしの海原はる、と浪路はなる、かりの一つら 音空  
 浦雁 うらの名のまた難波津の手習にかきもつ、かぬかりの玉つさ 政弘  
 田家雁 霧こむる田面におつる初厂の声もみにしむこのゆふへかな 石川純經  
 末遠きふしみの田面きり晴てほなみをわたるかりのひとつら 政弘  
 羈中馬 たひならぬゆふへの空に聞てたにかなしき物を天津厂かね 繁樹  
 秋風に旅寝の夢はさめはて、空ゆく厂の声のみそする 外山綱女

- 鹿 もみちゝる外山の風のさむければ妻とふ鹿のなかぬよもなし 五百杵  
 たくへ来る嵐の末にこほれけり真萩ちる野のさをしかの声 長廣  
 をかへなるわさ田の稲葉色つきてをしか妻とふ聲そかなしき 加納祥經」(43 オ)  
 ねさめしてきけはあらしもおとつれて暁寒く鹿ぞ鳴なる 祐利  
 岩間もる水のおとたにさひしきを雨のゆふへのさをしかの声 釈竹磨  
 きくたひに袖をそしほる秋深きよはのねさめのさをしかの声 大林静定
- 月前鹿 萩か元の露に宿かる月かけをねたしと鹿のよたゝ鳴らむ 美祢女
- 山鹿 かがひせし昔をこひてつくは山かのもこのものに鹿そ妻よふ 忠順  
 はつせ山あけゆくかねをうらみつゝ鳴くかをのへのさをしかの声 小野田義源  
 をくら山風のまにゝおちくなり紅葉にまじるさをしかのこゑ 行聴  
 もみちはのいろよりほかにをくら山よるはこかるゝさをしかの声 恒雄  
 たちこむるをくらの山の秋霧にくるゝもまたて鹿や鳴らむ 加藤嘉貴
- 山路伴鹿 はた寒き嶺のあらしにたくひ来て山路ともなふさをしかの声 正久」(43 ウ)
- 深山鹿 山深み杉の下道あけかねて残る夜霧にをしか鳴なり 壽仙
- 野鹿 みやきのゝ萩の錦にたちなれてよなゝゝきなくさをしかの声 小島正影  
 手枕の夢の小鹿の声すなりうつゝにあはぬ妻やこふらむ 重鏡  
 ひとりねのまくらに近くきこゆなり夢野の鹿のあけかたの声 美祢女
- 原鹿 あはぬよのつもるうらみをかさねてや真葛か原に鹿の鳴らむ 五百杵
- 海邊鹿 あまのこによるも袂をぬらせとやいそ山ちかくをしか鳴らむ 石川友女
- 田家鹿 われもしか聲たてつへきゆふへかな秋風寒き小田のかり庵 忠順  
 いなはふくかたの風のおとふけてかり庵寒く鹿ぞ鳴なる 倉垣長秋  
 なるこひく秋の山田のいねかてにきけはよすから鹿ぞ鳴なる 篤慶  
 かりてほすいねふみしたき鳴しかの声うらかなし小田の秋風 年乃女」(44 オ)
- 山家鹿 きくやいかに我すむ山の鹿の音をおくる嵐の末のさとひと 政弘
- 擣衣 うちかはすこなたかなたのさよきぬたわか身ひとつの寢覚にそ聞 忠敏  
 あきしのや外山の嵐さむからしきぬたのおとの打もたゆまぬ 多米女
- 深夜擣衣 うちすさふきぬたのおとはふけにけりねよとの鐘やきゝまきれけむ 重鏡
- 月前擣衣 くまもなくすむ月かけにこよひたれふくるもしらでころも打らむ 森美純
- 名所擣衣 から衣ころもよさむのつちのおとに萩の露ちる玉川のさと 美祢女
- 里擣衣 衣うつおとはかりこそ残りけれさむるふしみの夢のまくらに 仁(最後の二画なし) 翁  
 ころもうつ音を聞つゝ秋風のよさむの里に旅寝をそする 五百杵
- 海邊擣衣 なにはかた入江のあしよをかさねかりふく小屋にころも打なり 宣光
- 浦擣衣 浦風のさむきとまやのしのすたれしのにうつなりあまのぬれ衣 八千代女」(44 ウ)
- 松下擣衣 みつくきの岡の松かけくれそめて木まもる月にころもうつ也 繁樹
- 故郷擣衣 ふるさとにむかししのふのすり衣おもひみたれてたれかうつらむ 千濤
- 菊 めてそめし昔おもへは菊の花千とせの後も尚かをりけり 顕光  
 しめゆひしまかきの竹のよゝかけてかはらず匂へしらきくの花 篤慶  
 山人のめつてふ菊の花やさはよを長月にさきはしめけむ 宣光  
 草も木もかれゆく秋に白菊の千代をみよとやひとり咲らむ 松充  
 秋深くおけるをみれば露霜にいろ香まされるしらきくの花 三宅廣丸

九日菊 けふといへは老もわかゆときくの花かさして千代の秋やまたまし 常業  
 月前菊 月かけとおなし色なるしら菊はくもるをりにそをるへかりける 繁樹  
 菊如霜 霜のいろにまかひはて、も夕つくよさすかにかをる庭の白きく 五百杵」(45 才)  
 依菊待人 みわくらむ人をこそまで菊の花咲つるまでのこゝろつくしを 公阿  
 庭菊 あたならて花のさかりも長月の庭に久しくにはふきくかな 釈義讓  
 澤菊 あさ沢の浅き水ともしらきくの花や千とせのかけうつすらむ 千代女  
 池邊菊 頼なし鏡の池の水きよみちよのかけみるしらきくの花 深井多豆女  
 海邊菊 吹上にたつしら波とみわたせは菊の香よするうら風そふく 常業  
 仙家菊 やま人のちよをかそふる玉なれやよもきか庭の菊の上の露 英棟  
 禁中菊 おほきみの千代のかさしと久かたの雲井の庭の菊はさくらむ 大宮司守綏  
 九日登高 かをりさへ高き山路の菊の花千よのさかゆくしをりなるらし 常業  
 紅葉 山の邊の松の葉こしの夕日かけのこるや嶺のもみちなるらむ 嘉香  
 夕紅葉 入日さすとよはた雲もいろそへて光まはゆき夕もみちかな 渡辺政香」(45 ウ)  
 くれなるにそめての後もみちはの今ひとしほはゆふひなりけり 重見  
 ふもとこそはやくもくるれ小くら山ゆふ日の残るみねのもみち葉 石川信榮  
 そめのこすまつも入日にいろはえてもみちはならぬ山のはもなし 釈跨空  
 月前紅葉 あかすみる庭のもみちを心してよるのにしきになさぬ月かな 登波女  
 風前紅葉 山姫のたちまふ袖とみゆるかな嵐にさわく峯のもみちは 守富  
 名所紅葉 かつらきや秋や、更てもみちはのくれなるしつくえのはるの水 千濤  
 山紅葉 おりかけししつはた山のからにしきもみちかさねの色そことなる 都筑加受女  
 深山紅葉 やまふかくそむる紅葉のからにしききてみる人もなくてちるらむ 義宣  
 杜紅葉 霧晴て夕日にほへるかたをかのもりのもみちはちしほなりけり 忠明  
 露霜をたてぬきにしてもみち葉の錦おりかく衣手の森 原田發生」(46 才)  
 湖邊紅葉 さ、波やひらのたかねのもみつれはいろになりゆく志賀のうらなみ 登波女  
 社頭紅葉 たかちらすぬさそとみれば神垣に風のとむくるもみちなりけり 古道  
 まさかきの葉こしにみゆるてかたへは神のいかきの紅葉なりけり 重範  
 柞紅葉 ちれはこそふかき秋ともしられければ、その紅葉うすきなからも 音空  
 しくれにはやかてこたふるおとしても猶くちなしのは、そはの色 常業  
 松色不爭秋 ときは山のひにおつる松の葉はよその梢のあきやならへる 大炊女  
 茸狩 秋の香は山路にふかく成にけりいさかきわけむ松のこほれ葉 繁樹  
 栗 さかしらにあらそふ猿をにくしとて木つたふま、に栗のおつらむ 音空  
 秋雨 風すさふ桐の落葉におとそへてねさめさひしきよはのむら雨 實綱  
 野分ふくかやか軒はに音そへて窓うつ秋のよはのむらさめ 大林申蔭」(46 ウ)  
 秋山 あけぬるかふもとのかたは立こめてきりのうへなる山そみえゆく 重熙  
 秋野 秋はきに袖にはほせてしめのゆきむらさきのゆきけふはくらしつ 登波女  
 秋原 こほろきの鳴音もさむく秋ふけて月かけすこき野路のしの原 廣冬  
 秋蟬 きはみゆく木の葉にそひてなくせみの声のいろさへかはりはてぬる 政弘  
 秋山家 月かけと鹿のなく音とかなしさはいつれまされり秋の山里 五百杵  
 山さとの秋のゆふへのさひしさをたへんと思へはさをしかの声 繁樹  
 ふく風にさゝくりおつる夕くれのさひしき軒にましら鳴なり 竹生朝貞

このまもる有明の月に鹿鳴てねさめさひしき秋のやまへや 池田周恒  
 秋興 秋の野は花にもみちにさまゝのむしもこゝろをそめて鳴らむ 信  
 山路秋興 もみち葉をたつぬる秋の山道にまつをりかさすしらすくの花 正久(47オ)  
 野外秋望 たれならむ旅のいほりはかりふかてくれゆく野への尾花わくめり 繁樹  
 秋雑 舟見山もみちこかるゝ折しもあれかりかねわたるこしのうなはら 英棟  
 暮秋 こほれおつる秋の末野のさゝ栗にのこるもうすき夕日かけかな 祐巖  
 露霜のおくてかりほす山里のあきのはつきに百舌鳥ぞ鳴なる 速夫  
 ちり残る庭の紅葉も秋の日もかそふはかりになりけるかな 加藤矩道  
 暮秋雲 ゆく秋の空にうきたつむら雲はあすのしくれのしるしなるらむ 元明  
 暮秋月 むしのねも霜によわれる浅ちふにやつれて残るありあけの月 玄文  
 ゆく秋の霜の梢にかけさえてそまぬは月の桂なりけり 明  
 暮秋時雨 おく露を秋のかたみとみる袖にやかてふりそふむらしくれかな 豊村  
 暮秋霜 にほの海や浮巢のうへに霜おきて水にも秋のはてはみえけり 壽仙(47ウ)  
 暮秋菊 咲にほふきくひとくさの花ゆゑに秋の末野はやつれさりけり 宣光  
 暮秋虫 いつのまに声うらかれてきりゝゝす冬をとりのかへになくらむ 信由  
 ゆく秋の末野のきくの葉かくれに露をいのちと虫のなくらむ 三宅道熙  
 暮秋野 うらかれしちくさの花に霜さえて秋のうち野も冬こゝちせり 忠順  
 暮秋川 紅葉ちりくれゆく秋の早瀬川いろなる浪にあゆもおつなり 田中宣雅  
 閑居暮秋 あすよりは人めもなほやかれなまし葎の宿にあきのくれなは 音空  
 幽居暮秋 くれねけふ日数はかりはとちめても秋はつねなるむくらふの宿 公阿  
 羈中暮秋 秋もやゝ末野の原の艸枕かたしく袖にしくれふるなり 長貴  
 九月盡 くれてゆく秋のわかれの袖の露よにもあたるかたみなりけり 美石  
 見わたせばをはなか末になりけりけふはかりなる秋のひかけも 杉浦於本伎(48オ)  
 (白紙)(48ウ)

## 冬

初冬 ふきすさふ嵐の末やしくるらむ秋と冬との行合のそら 公阿  
 霜はらふあらしそ寒きかれを花まねくかたより冬やきぬらむ 青龍寺圓壽  
 あきもはやすきの板戸の夕しくれふるおと寒く冬はきにけり 申蔭  
 みよしのゝ故郷さむくしくるゝは高嶺をこえて冬や来ぬらん 大林意備  
 ときしらぬまつのはやまのかけまてもはつ霜白く冬はきにけり 莊田喜章  
 初冬時雨 さためなきしくれの雨にさたまりて冬としらるゝこの朝けかな 正興  
 けふよりと空にしられてふりそむるしくれや冬のつかひなるらむ 小川定元  
 かれてたつ萩におとして冬きぬとしくれさへこそおとろかしけれ 忠順  
 きふまで木の葉たゝきし北窓にけさふりかはるむらしくれかな 重愛(49オ)  
 冬されは小野のしの原しのひあへす音にたてゝもふる時雨かな 八千代女  
 初冬霜 かせ寒みかた山かけの霜柱冬とゝもにもたちけるかな 釋臨諦  
 初冬氷 ちりうかふ柞の紅葉それなからさほの川水うす氷せり 宣光  
 初冬山 きふよりけふはまさきのいろみえて冬にもかゝるかつらきのやま 常業  
 社頭初冬 まつにのみあを葉はみえて水鳥のかものやしろに冬はきにけり 深見昂蔵

十月更衣 ぬきかふる冬の衣のくちはいろなほそめかほに時雨ふるなり 公阿  
 時雨 さひしさもきのふにけふはます鏡くもりみはれみしくれふるなり 忠順  
 そめ、しこの葉の後はわひ人の袖をたつねてふる時雨哉 美石  
 うき雲のか、らぬ里もあるものをわかゆく方は打しくれつ、 重見  
 そめぬまのなさけわすれて今はまた紅葉にいとふむら時雨かな 岩崎兌健」(49ウ)  
 あともなくはるれはやかて山風のまたさそひくるむらしくれかな 林直幹  
 暁時雨 さしくしのあかつきおきのむらしくれたかきぬ、の袖ぬらすらむ 千代女  
 かたしきの衣手さむき暁のねさめのまくらとふしくれかな 小川清素  
 夕時雨 うき雲のたえまに月はみえなからしくれてくる、冬の山さと 釈丈立  
 夜時雨 木からしに夢はくたけし山窓をうつ、に過るさよしくれかな 関根美意  
 さや、にはや過行てさよ中の夢も跡なきむら時雨かな 竹尾正胤  
 月前時雨 久かたの雲まもりくる月かけにゆくかたみえてふる時雨かな 真一  
 こからしにくもは跡なくちりはて、月のかけよりふる時雨かな 好文  
 中空をすきまの月はみえなからふくるよかはに時雨ふるなり 長廣  
 河時雨 ふちにせにふりかはりけり飛鳥川空の時雨もところさためす 公阿」(50オ)  
 山路時雨 冬かれてたのむこかけもなき山を夕越くれは時雨ふるなり 清蔭  
 しくれのみまなくかよひて木の葉ちる冬の山路はあふ人もなし 速夫  
 我袖はしくれにいたくぬれにけりほすほとはかり衣かせやま 和田繁穂  
 屋上時雨 聞なれしこののはのふるにかはらやのかはれるおとや時雨なるらむ 公阿  
 鞆中時雨 さらぬたに心ほそ江のあまた、ひしくれにぬらす旅衣かな 宣光  
 船中時雨 朝日山しくる、雲のおひかせにくたすもはやき宇治の河舟 興督  
 十月紅葉 もみちはの下行水の色にたに冬の日なみのたつはみえけり 公阿  
 残紅葉 ちり残るこ、ろつよさもいかならむ一木の紅葉嵐ふくなり 忠敏  
 残雁 古郷をわかれかねてやおくれけむ冬の田面に落る厂かね 釈徳空  
 落葉 かきつめてみきあた、めむをすのにとすきかけみえてもみちはのちる 直温」(50ウ)  
 かせたえてしつけき庭にほろ、とおつるこののはの音そさひしき 遊佐成憲  
 いさ、めのしくれの雨にたへかねてかことかたしくちる木のはかな 菅守  
 落葉脆 あらしにはちるへきものとりりにけむうすきもまじる庭のもみちは 顕光  
 夕落葉 ましらなくかた山はやしくれそめてこからしさむくちるもみち哉 重鍊  
 入日さす岡のもみち葉みたれあひて風もいろある夕くれの空 美志女  
 夜落葉 あけはみむこのよあらしのおときけはよその紅葉もさそひきぬめり 千代女  
 月前落葉 空高く夜はのあらしの吹あけて月の桂とちる紅葉かな 英棟  
 さよふけてねさめの窓にかけみえて月に落くる庭のもみち葉 音空  
 庭落葉 梢をははらひつくしてよもすから落葉にさわく庭のこからし 西村為徳  
 名所落葉 冬はまたをくらの山の朝な、きのふ恋しき風のもみちは 英棟」(51オ)  
 山路落葉 雲か、る山のしたみちわけくればしくれおほえてちる木葉かな 塩田岡瑛  
 河落葉 おほる川かめの尾山の朝風にうき、の花とちるもみちかな 千濤  
 たに川のこほりのうへを吹わたる風になかれてゆくもみちかな 長秋  
 風さむきふゆの日なみはたつた川もみちのにしきかさねてそきる 充芳  
 湖上落葉 さ、波のひらの山風ふきにけり浪ももみつる鳩のうみつら 多米女

閑居落葉 かよひちは落葉にたえて木からしの風のみ庭におとつれにけり 松井盈象  
 山家落葉 山里はかけひのみちもたゆるまでつもりにつもる風のもみち葉 正久  
 殘菊 冬きても老せぬやとの菊の花月日おそくや霜もおくらむ 英棟  
 秋をへて残るもさひし冬の野の霜にやつるゝしらきくの花 満須女  
 霜八たひおくよりいろのまさり草冬をむねとはうゑぬ物から 公阿」(51ウ)  
 寒草 さわかぬもなかゝゝさひし山かせを結ひとめたる霜のをすゝき 五百杵  
 むさし野やいろあらそひしやちくさの花はみなから霜かれにけり 孝本  
 なまめきし俳もなくかれふして風もすさめぬをみなへし哉 登波女  
 月照寒草 むすひおきし露のちきりをたつねきて月そことゝふ霜の浅ちふ 重見  
 寒草霜 霜ふれは又花さきぬすゝむしの鳴からしたる野への冬くさ 正久  
 うちまねく尾菊か袖もうらかれておく霜しろし武蔵のゝ原 富田有恒  
 寒芦 ありてよのはてこそうけれ霜かれて入江にたてるあしの一むら 美石  
 夕霜のふる江にさわくたづかねもまたれてさむし芦のむら立 直温  
 あさほらけ氷はてたる池水にのこるもさひし芦の霜かれ 伊東古吟  
 霜かれてたてる難波のあしの葉のそよくもさむし浦の夕かせ 小池忠恕」(52オ)  
 水郷寒芦 あゆつるとよりし人めもかれあしのほわたの色につもる雪かな 公阿  
 寒樹 冬かれの野中にたてるひとつ松ひとりつれなきいろもめつらし 英棟  
 寒樹風 みねつゝきこすゑあらはに成はてゝ一声松にのこるこからし 幸信  
 寒松 いろかはるふる葉はおちてこからしに今一しほの庭の松かえ 公阿  
 木枯 さりけなき松のときはをねたしとや猶ふきすさふ峯のこからし 竹尾正頼  
 月前木枯 もみち葉はさそひつくしてあらはなるこのまの月にこからしそふく 親常  
 霜 かけうすき冬の日の岡こえくれはけさ見しまゝの霜の色かな 忠敏  
 むさし野はあさ霜寒し不二のねの雪のいろさへそふこゝちして 直温  
 初霜 いろもなくうつろふ庭の浅茅生にけさあたらしき霜の初花 正胤  
 きふまで庭のこけちにいろはえしもみち葉しろしけさの初霜 岩瀬愛真」(52ウ)  
 暁霜 わかやとの庭のさゝ原風たえて暁さむきしものいろかな 星田三辰  
 松上霜 岩代のまつはいつともわかねとも霜のみ冬とむすひそへけり 宣光  
 山路霜 朝霜にとくあとつけてのる駒の足から山をたれかこえけむ 大炊女  
 野霜 かれ残る荻の葉風もおとたえておく霜しろし野へのあけほの 渡辺政均  
 田霜 ひき捨し水田のおものなるこなは一すちしろくむすふ霜かな 英棟  
 橋霜 霜のうへにかたふく月のかけさえてわたるも寒し野路の板橋 學空  
 氷 もみちはゝちりてのゝちもなかさしと氷をいそく山川のみつ 三尾女  
 暮ていにし秋のかたみの紅葉をむすひとめたる岸のうすらひ 廣冬  
 薄氷 吹わたる朝風さえてきのふけふ結ひそめたる池のうすらひ 岡村恒寧  
 いろくつの数さへすきて見ゆるかなまた冬あさき池のうすらひ 充芳」(53オ)  
 井氷 よはなれてすむ山の井のみつからもこほりそめてや冬をしるらむ 信由  
 池氷 津の國のこや冬ならしあしつゝのひとへむすへる池のうすらひ 常業  
 川氷 いはたゆく床の山なるいさや川いさよふ水そまつこほりける 忠敏  
 あさるへき浅河水やこほりけむろくひつたひに鷺のとふみゆ 千濤  
 田氷 霜かれぬ小田のひつち穂そのまゝに結ひそめけりけさのうすらひ 政詳

- 冬月 こからしのふきし後瀬の山の端をあらはにいつる冬のよの月 登波女  
見し秋のおもかけもなき浅茅生にかれずも月のすみわたる哉 木村益篤  
冬の夜の空になかる、月みれは雲の波こそこほらさりけれ 山本春恒  
松かえにさわきし風のおとたえてあさちか霜にこほる月かけ 菅守  
天の原冬のよわたる月かけは空にみちたる氷なりけり 鈴木多計女」(53ウ)  
おく霜のいろもひとつにさゆる夜は月もさなから氷なりけり 加藤多美女
- 暁冬月 草枕霜をかたしく袖のうへにひかりもさむきありあけの月 釈観誠
- 河冬月 ふけゆけは岸はこほりて冬のよの河音さゆる月のさむけさ 間瀬春川
- 湖上冬月 夜をさむみ人はとたえしすはの海の水をわたる月のかけかな 石田正祐
- 江冬月 むらあしのかれはのあらしさえくれて入江にこほる月のしら波 繁樹
- 池冬月 くまなしとこすゑは風に吹はれておち葉にくもる池の月かけ 太田從繩
- 山家冬月 山里は軒端の木の葉ちりはて、冬こそ月はくまなかりけれ 釈義観
- 社頭冬月 木枯にくもりみたれみうき雲の宮居にさゆる冬のよの月 森阿都女
- 葉落月明 もみち葉のちりし梢に風さえてさひしくふくる冬の夜の月 下村亮士
- 破林霜後月 紅葉ちるかた山はやし月更て霜よのかげのさむくもあるかな 廣冬」(54オ)
- 衾 しもさゆるよるともしらていをやすくふすまそ老の命なりける 宣光  
たらちねのあつき心をつくしわたいれしふすまはさえずそ有ける 政弘
- 網代 あしろもる衣手寒しもの、ふの八十字治川のよるのあらしに 重瀧  
網代木にいさよふ波のゆくへさへこほりてみゆる宇治の川風 豊村  
もりあかす網代の床やいかならむひをへてさゆるうちの川かせ 了游  
大君の御贄おもはば川の名のうちとないひそ網代もらすね 守富
- 千鳥 たちあする沖のしらすのむら千鳥さこそは波のまなくよすらめ 重鍔  
しほみてはかたもなにはのうらふれて夕浪千鳥月になくなり 常業  
さ、波やこほれる海のみなと風たへぬ千鳥や夜た、鳴らむ 五百杵  
夜もすから妻なし千鳥聲すなり浪の枕やさためかぬらん 春恒」(54ウ)  
をちこちに声さたまらぬ浦千鳥よるへもなみにたちまよふらむ 西福寺佐以女
- 夜千鳥 月かけも氷るひかたのさむけさに友よひかはすさよちとりかな 植田義方
- 名所千鳥 妹かしまあさりかねてやさよ千鳥あひみかたみの浦に鳴らむ 弘道
- 川千鳥 かせをいたみくたくる浪の玉川に聲みたれてもなくちとりかな 森浪恵廸  
夜もすから苦もる月のかけさえてちとり鳴なり淀のかはふね 浅井政文
- 浦千鳥 冬かれの尾花をわたるまの、浦の波風さむみ千鳥になくなり 重滝  
夕されはうら風さそふしほかまのけふりの末にちとり鳴なり 柴田鐸女  
すみの江のきしの松風おとさえて浦浪高く千鳥になくなり 釈國香
- 磯千鳥 夕されはさかなもとむる人たえて千鳥友よふこよろきのいそ 繁樹  
もみち葉のちるかともみれはをちかへり磯山かせに千鳥鳴なり 忠順」(55オ)
- 濱千鳥 しほかせに声もみたれてよる波のあらつの濱に千鳥鳴なり 宣光  
しほかせに声吹上の濱千鳥波のひまなく友さそふらむ 大竹久倉
- 旅泊千鳥 さらぬたに夢さたまらぬ浪枕おとろかしてもなくちとりかな 八千代女
- 水鳥 朝日さすあしまの氷打とけてねふりもよほす池の水とり 宣光  
波あらふなきさのあしの葉かくれになく音かたよるあちのむら鳥 祐巖

いかはかりうきねわふらむあしかものこほりのとこにあられふるなり 重範  
 大井川下すいかたになれゝゝてみきはかたよりあそふ水鳥 積貞應  
 夏箕川山のとかけに月おちてかもの声こそたかくきこゆれ 鶯山  
 芦間水鳥 霜かれぬ入江のあしとおもひしは鴨の青羽のよそめなりけり 清蔭  
 水鳥馴舟 あさなゝゝ下す小舟のみなれ棹なれてさわかすあそふみつ鳥 城所重隆」(55ウ)  
 霰 朝狩に篠原分るむかはきの熊のあらけに霰ふるなり 深見美脩  
 冬のよの夢はくたけて山窓をうつゝにすくる玉あられかな 長廣  
 木からしにかしのみおちし板ふきに又はらゝゝとあられふるなり 繁樹  
 海上霰 いせのうみのしほひにあそふあまの子かひろはぬ玉はあられ也けり 篤慶  
 旅宿霰 たひねするかた山はやし風さえて折しく柴にあられ降なり 村上恭甫  
 霰 かきくもりしくれし雲に風さえて又ふりくるはみそれなりけり 明  
 雪 あすもまたなにはすか笠きてをみん雪にはえある小屋の松原 忠敏  
 けさみればみゆきふりたりねやのとのされはよまたきひましらみ唄 忠順  
 春の花秋の月にもけおされぬ雪こそ冬のひかりなりけれ 恒雄  
 初雪 かきくらしふるとはすれとはつみゆきけしきはかりはつもらさりけり 忠敏」(56オ)  
 冬なからまちかき春のおもかけにけさちりそむる雪のはつ花 長廣  
 曙雪 ふゆの夜もまたきあけぬと思ひけりあかつきやみは雪にうもれて 八千代女  
 おもひしにたかはさりけりことさらにさえし夜床の雪のあけほの 美祢女  
 朝雪 竹馬にゆきのあさ道たとりしをおもへは年もつもりけるかな 政弘  
 夕雪 むら鳥のねくらもとむる山のはに夕をゝしむ雪のいろかな 真清  
 夜雪 雪深くつもりにけらしさよふけてしゝまになりぬ峯の松かせ 忠順  
 ねさめとふ軒はのまつの風たえて枕にひゝくゆきをれの声 安年  
 爐邊夜雪 かまのゆにおとをのこしてさよ深くうつむか雪の庭の松かせ 信由  
 山雪 しろたへに雪降りなきのふまて紅葉こかれしふなをかの山 英棟  
 ゆきかひになつまん駒のあしからや八重山とほく雪ふりにけり 三千代女」(56ウ)  
 雪満群山 ふりつもるみねしろたへにあけそめて雪におくあるみよし野の山 音空  
 山月照雪 空たれてさやかにみゆる白雪に月もてりそふ冬のやまのは 加藤梁守  
 樵路雪 しつの男かおへるえひらの椎柴につもるみ雪や重荷なるらむ 鈴木多計女  
 野径雪 袖はらふ陰とたのみて来しものを末野の松は雪のしたをれ 正久  
 岡雪 ふる雪にゆくかたをかかぬか本袖うち拂ふかけとたのまん 宣光  
 湖邊雪 さゝ波や志賀の浦かせさゝゝて雪の波こすからさきのまつ 和田雪女  
 海邊雪 見わたせはいそ波しろし吹しきる風にちりくる雪のあけほの 八千代女  
 浦波のこすとこそみれ白雪のふりつもりたる末のまつ山 古考  
 よもすからふりにし雪をしら波のうへにけさみる遠のしまやま 浅井桂甫  
 里雪 比良の嶺の雪ふきおろす朝ほらけあらしもにほふ花垣のさと 仁(最後の一面なし)翁」  
 (57オ)  
 山家雪 ふる雪にうき世の道もたえはてゝいとふかひある山のおくかな 五百杵  
 古寺雪 あかつきをまつ雪こそちりにけれ高野の山の鐘のひゝきに 廣冬  
 橋上雪 朝ほらけ駒のあかきもふりつもる雪におとせぬせたの長はし 伊奈義方  
 庭雪 ふりつめは人はとひこて雪をれの音信さむし庭のくれたけ 加藤廣正

庭雪深 やさかつむ雪に日かすのあらそひもしのはれにける庭の面かな 長春  
 庭雪厭人 ちりもみぬ庭の白雪とふ人をわたすはかりのうちはしもかな 千濤  
 雪作山 うなる子かつとひてつくる雪の山老てはさむきまとよりそみる 千代女  
 雪中待人 あけまきに火桶のちりをはらはせて雪に友まつつれゝのやと 忠敏  
 雪中客来 ふみわけし人の心にくらふれはなかゝ、浅き今朝のゆきかな 顕光  
 松雪 夜のほとにちよやへぬらむしら雪に庭の若まつ翁さひせり 忠順」(57ウ)  
 樹蔭雪 たちよりてたれかは袖をはらひけむこのしたかけも深き雪かな 忠敏  
 竹雪 木にもあらず草にもあられて咲にけりそのふの竹の雪のはつ花 常業  
 雪中鐘 しら雪のつもれる高嶺はくれかねてふもとにひゝくいりあひの鐘 釈光郷  
 ふりつもるゆふへはいとゝさやけて雪にうもれぬかねのおとかな 恒雄  
 雪中眺望 うちわたす雪のふる寺道たえてかよふはかねのひゝきなりけり 三橋安貞  
 野行幸 ふりつもるみゆきにきしるみくるまのさきおふはてやさかの野司 公阿  
 鷹狩 おく霜のしらふの鷹の鈴のおともみにしみわたる野への朝かせ 親常  
 駒なへてあすも又こむあかなくにひもおちくさのみかり野の原 忠順  
 狩場雪 ふりしきる雪のしらふの鷹すゑてかへるさゝむしみかり野の原 釈洞流  
 埋火 筆とれはとるてわなゝく冬のよはたゝ埋火をかきおこしつゝ 繁樹」(58オ)  
 灰かちになりゆくまゝに埋火のあたりも寒くよはふけにけり 玄文  
 かたるべき友もなければ埋火をかきおこしつゝあかすよはかな 釈松翁  
 この頃はよはの嵐のさむければ老の命とたのむうつみ火 国分真斐  
 爐邊閑談 もろともに言葉の花のさくら炭はるの心もかきおこしつゝ 政弘  
 炭竈 世わたりのほそきなけきもこりそへて烟やたつる小野の炭やき 美石  
 山めくるしくれの雲も立そひてけふりにくもるすみかまのさと 年乃女  
 峯炭竈 雪深くつもれるみねにすみやくも烟をたつるためにこそあれ 公阿  
 神樂 霜にさえ庭火にすみて笛のねもかきひく琴も更るよは哉 繁樹  
 月前神樂 やまあみの袖の月かけさえゝゝてあかほしうたふ夜はふけにけり 重鏡  
 佛名 きえぬらむ雪とつもりし身の罪はよゝの仏のてらすなりけり 恵直」(58ウ)  
 早梅 わすれては雪にもほふと思ふかな春にさきたつ梅のはつ花 定禱  
 日かけさすかた枝は春にさきたちてほゝゑみそむる梅の初花 元明  
 雪中早梅 咲ぬやと雪かきはらふこゝろもいたつらならぬ梅のはつはな 釈誠範  
 冬風 はれわたるこすゑの雪を吹ませて月にあまきるみねの松風 長廣  
 冬雨 みよし野は雪かふるらむ三笠山さしも寒けき夕くれの雨 英棟  
 冬曙 春秋のあはれあらそふ月花もなかめおよはぬ雪のあけほの 橋本夏繁  
 冬暁 うつみ火は霜としらみて暁の枕にこほるかねのおとかな 政弘  
 冬朝 をちこちにあさりし鳥のあとみえて朝霜さむし野へのかよひち 八千代女  
 冬野 ものすこく野は霜かれてひとむらのをさゝかうへにあらし吹なり 利亮  
 霜さゆるのへの玉笹たまさかにのこれるいろもやすからぬかな 重見」(59オ)  
 冬河 しもかれて氷る野中の草川は水のみとりも残らざりけり 忠敏  
 冬木 たち花の霜にてるみは此ころのいろなき庭のにほひなりけり 政弘  
 冬虫 霜さゆるをさゝか原のきりゝゝすかれのこるねそあはれなりける 五百杵  
 はつ霜のふる野の草になくむしのいまはの声そかなしかりける 孝本

冬山家 雪深き北白川のまつの門さゝても冬はとふ人そなき 英棟  
 冬遠情 ひかけみぬあたりの冬やいかならむたゝさす国もさむき此ころ 正久  
 冬神祇 おもふ事あまつをとめもいのるらむいかきにかくる雪のしらゆふ 忠順  
 待春 老となる年木はつめとかはらぬはこん春をまつこゝろなりけり 龍光  
 歳暮 老の身のあらたまるへき春ならは年のくるゝもなにかなけかむ 鈴木梁満  
 ひとゝせのすくるは夢のこゝちしてつもる年のみうつゝ也けり 祐利」(59ウ)  
 たつ春をまちし昔に引かへてまたぬにはやき年のくれかな 近藤政和  
 雪中歳暮 老か身につもれる年をわすれては雪はかりともおもひけるかな 大成  
 市歳暮 やましたをうるまの市にかふ人の心やはるにまつうつらむ 千秦  
 山家歳暮 よのわさのいとしけからぬ山里は年のさかちもこえやすきかな 八千代女  
 歳暮祝 老ゆかん事はわすれてをさまれるみよの春まつとしの暮かな 忠明  
 追儺 いへことになやらふこゑにおとろきて年もいまはといてゝゆくらむ 忠順  
 年内立春 みゆきちるあらしの窓もひゝらきをさすかにけふは春めきにけり 繁樹  
 としのうちにふたゝひ春は立ぬれと老のかすにはさはらさりけり 守景  
 朝日かけさすかに年のこなたにもたつ春しるくにほふ梅か香 信貞  
 除夜 としくるゝこよひのとかにともし火の花にむかひて春やまたまし 信順朝臣」(60オ)  
 (白紙)」(60ウ)

